



Title	＜翻訳＞ムハンマド・フサイン・アーザードのウルドゥー詩改革に関する講演（1874年）
Author(s)	松村， 耕光
Citation	印度民俗研究. 2026, 24, p. 97-107
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/104691
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ムハンマド・フサイン・アーザードの
ウルドゥー詩改革に関する講演
(1874 年)

松村 耕光 訳・註

お集りの皆様。今日、私は或る問題についてお話しするために参りました¹。私の手に余る問題ではあるのですが、今や愛国心²が黙っていることを許してくれない状態になっている、このインドと呼ばれる広大な国の言語に關することでありますので、お話しさせて頂きたいと思います。その問題とは、我々が言いたいと思っていることをすべて言い表し、著述一般や娯樂にも用いられるウルドゥー語の、その詩文に關する問題であります。今、インドの言語の歴史を掘り起こしている時間はありません。こう言うだけで十分でしょう、我々が現在用いている言語すなわちウルドゥー語は、元々インドのブラジ・バーシャー³であり、そこにファールス⁴から旅人⁵が訪れ、家^{インド}の主人はその招いてもいない旅人に寛大にもその旅人が満足するような住处を与えたのである、と。

ご存じのように、ブラジ・バーシャーは当時、広く普及していた言語でしたが、宮廷や学問を支配していたのはその母親、すなわちサンスクリットでした。その膝の上では雄弁と修辭の大河が大きく身をくねらせていました。ブラジ・バーシャーは家庭の雑務に關する事柄や市場での売り買いに關して、貴賤の區別なく、人々の必要を満たしていましたが、学問、著述の言語ではありませんでした。そのため、その詩文はサンスクリットのように隱喩や直喩がもたらす繊細さの極みには達していませんでした。にもかかわらず、それは如何なるときでも見事にそして美しく言いたいことを表現していました。ご存じの方もおられることでしょう。

バーシャー⁶から生まれたウルドゥー語は、数百年間、話し言葉のまま著述には用いられませんでした。しかし如何なる大地も植物なしではいられないように、如何なる言語も詩なしではいられません。数百年前からウ

¹ ムムターズ・アリー編集版『アーザード詩集』では、「或る問題について少しお話ししたいと思います」。

² 愛国心が擬人化されている。アーザードが好む技巧である。

³ アーザードはウルドゥー文学界に大きな影響を与えたその主著『生命の水 (*Āb-e ḥayāt* 初版 1880 年、第 2 版 1883 年、第 3 版 1887 年)』においても、ウルドゥー語はブラジ・バーシャーに基づいて成立したと述べ、ウルドゥー語ブラジ・バーシャー起源説を流布させたが、この説は、アーザード以前から有名な文人たちが唱えていた説である (Mirzā Khalīl Aḥmad Bēg, *Urdū kī lisānī tashkīl*, Aligarh, 1990, p. 25)。

⁴ 「ファールス (Fārs)」 ペルシアのこと。

⁵ ペルシア語のこと。

⁶ ブラジ・バーシャーを指す。

ルドゥー語でも首尾一貫しない（とは言え）詩⁷が作られています。シャージャハーンの死後⁸、この言語の年齢が百歳となると、ワリー⁹という詩人が現れ、各所で（ウルドゥー語の）詩集が編纂されるようになりました。

ウルドゥー語の¹⁰使用者は元々ペルシア語を用いていた人々の子孫でした。それで彼らはペルシア詩のあらゆる韻律、ペルシア語の興味深く、華麗な詩想、さまざまな表現様式をペルシア語からウルドゥー語に写し取ったのです。驚くほど素晴らしい表現や美しさが生み出され、その結果、この国特有の風土に基づいていたインドのバーシャーの詩想は失われてしまいました。貴賤を問わず人々は、パピーハー（papīhā）鳥¹⁰やカッコウ（kōyal）の鳴き声、チャンパー（chañpā）¹¹やジャスミンの香りを忘れてしまい、ハザール（hazār）鳥¹²やブルブル（bulbul）鳥¹³、黄水仙やヒヤシンスなど一度も目にしたことのないものを称賛するようになったのです。勇猛なルスタム（Rustam）¹⁴やイスファンディヤール（Isfandiyār）¹⁵、高く聳えるアルヴァンド（Alvand）山¹⁶やベーストゥーン（Bēsūtūn）山¹⁷、淀みなく流れるオクサス河やシル・ダルヤ河が大きな嵐を引き起こし、勇敢なアルジュナ（Arjun）¹⁸、緑なすヒマラヤの山々、雪に覆われた頂き、滔々と流れるガンジス河やジャムナー河を押しとどめてしまったのです。

無論我々はペルシア語に感謝しなければなりません。ペルシア語のお陰で我々の詩に高く飛翔する力や心を駆り立てる力が生まれたのですから。ペルシア語の隠喩や直喩によって数多くの繊細で精緻な詩想を表現する

⁷ 原文では「散乱した詩句（parēshān shi‘r）」。ガザル（ghazal）のことと思われる。ガザルは恋愛を中心的詩題とする定型抒情詩で、1詩句（2行）ごとに意味が独立しており、意味的な統一性はない。したがってガザルにはタイトルは付けられない。

⁸ ムガル皇帝シャージャハーンは1666年に没した。

⁹ ワリー（Walī, d. ca. 1707）はアウランガーバードの詩人で、その簡明で甘美なウルドゥー詩はデリーの詩壇に大きな影響を与えた。

¹⁰ カッコウの一種。

¹¹ 金香木。

¹² 小夜啼鳥。

¹³ 小夜啼鳥。辞書ではハザールと同一に扱われている。

¹⁴ 詩人フィルダウスイー（Firdausī, d. ca. 1025）のペルシア語叙事詩『王書（Shāh-nāmah）』に登場するペルシアの英雄。

¹⁵ ルスタムと闘った英雄。

¹⁶ イランにある山。

¹⁷ イランにある山。ビーソトゥーン、ベヒストゥーンとも。

¹⁸ 『マハーバーラタ』の登場人物。

力が生み出されました。これらの詩想はペルシア語の詩文に由来しています。その花園では繊細極まる隠喩の微風が芳香を広げ、精妙極まる直喩の夜露が美しい輝きを与えています。その花園の花々の香りが我々の言葉の中に移ってきたのです。その詩想の飛翔力と繊細さには限りがありませんが、本当に言いたいことを探してみても、繊細な言葉の暗がり、隠喩の闇の中を飛ぶ一匹の蛍のようなもの——輝いたかと思うとすぐに消えてしまうのです。

これまで雄弁の花園の面倒を見て来られた皆さん。雄弁とは、誇張や飛翔（豊かな想像力）の翼で飛び上がったたり脚韻の羽で飛び去ったりすること、美辞麗句と格調ある単語の力で天に舞い上がったたり隠喩の底に沈んでしまったりすることを意味するものではありません。雄弁とは、喜びや悲しみ、事物に対する好悪の感情、恐れ、怒りなど自分の心にある思いを叙述することによって、実際に体験することによって生じるような、まさにそのような感覚、感情、興奮が聞いている人々の心に生じることを意味するのです。誇張という力や直喩、隠喩という塩は言葉の面白味や何らかの妙味を増加させはしますが、しかし塩味を付ける程度に必要なのであって料理全てが塩となってはならないのです。表現するとき、直喩や隠喩は、戦場、宮廷、庭園が描かれた絵画の情景をより美しく見せる鏡のようなものでなければなりません¹⁹。絵画に描かれた情景が見えなくなるような鏡であってはならないのです。我々は今、何を為すべきなのでしょう。必要に応じて隠喩、直喩、簡潔なイザーファト（単語連結）²⁰をペルシア語から採り、簡明さ、写実的な表現をバーシャーから学ぶべきなのです。しか

¹⁹ 中央に鏡が据え付けられた絵画を念頭に置いているようである。『生命の水』英訳版解説の中でウルドゥー文学研究者シャムスッラフマーン・ファールキーは、「詩人たちは技巧の装飾を少し施すこともあるであろうが、薔薇の花びらに宿る露、絵画に据えられた鏡程度である」（*Āb-e hayāt*, Lucknow, 1982 [Nawal Kishore が出版した *Āb-e hayāt*, Lahore, 1907 を Uttar Pradesh Urdu Academy がリプリントしたもの。英訳はこの版に基づいている], p. 123) という『生命の水』中の一文を引用し、「絵画に据えられた鏡」に “Fancy medieval mirrors were mounted on large pictures, or pictures were painted around them” と註記している（Shamsur Rahman Faruqi, “Constructing a literary history, a canon, and a theory of poetry,” in Frances Pritchett, tr., *Āb-e hayāt*, New Delhi, 2001, p. 44）。

²⁰ ペルシア語では名詞 A と名詞（或いは形容詞）B とを短母音 e で接続し、A-e B という形にして「B の A（B な A）」という意味を表す。このような単語連結をイザーファト（izāfat）と言う。「～の」を意味する後置詞 *kā* を用いて B *kā* A というより単語接続の緊密性が増すと考えられている。

しこれだけでは十分ではありません。時代が変化したからです。よく見ると、雄弁と修辞の美術館が開いているのが目に入るでしょう。そこではヨーロッパ諸言語が、それぞれの著作物の花束、首飾り、立派なターバンを手にとって立っています。我々の詩は何も持たず、一人茫然と佇んでいたのですが、今や、手を取って誰か自分をそこに連れて行ってくれるような勇気のある人が現れないかと待ち望んでいるのです。

同胞の皆さん。私は皆さんの詩が装身具にも事欠いていると言っているではありません。そうではないのです。皆さんの詩は祖先から裾の長い礼服、重い装身具を受け継いでいます。しかし残念ながら礼服は古くなり、装身具は時代遅れになってしまいました。皆さんの祖先、そして皆さんによって常に新しい題材や新しい様式が提供されてきましたが。しかし、今の時代にふさわしい新しい様式の礼服や装身具は英語の衣装箱の中にしまわれているのです。その箱がすぐ横にあるのに我々は気付いていないのです。その衣装箱を開ける鍵を持っているのは、英語をご存じの同胞の皆さんです。今、私は英語という富を持つ皆さんに申し上げなければなりません。皆さんは自分の国の詩がこのような状況にあるのを見ても悲しんでいません。皆さんの祖先が残してくれたものが今まさに消え去ろうとしているのに、皆さんは痛みを感じていません。皆さんは自分の金庫や新しい倉庫²¹を用いて詩がその状況を改善し、何処の宮廷にでも行けるようにしていません。求められていること以上に行動することが祖国への義務なのです。

バーシャーにペルシア語が影響を与え、ウルドゥー語の詩文は独特な味わいを獲得しましたが、これはバーシャーとペルシア語の双方を知っていた人々の力によるものでした。考えてみてください。当時のバーシャーとペルシア語の状況は、今日のウルドゥー語と英語の状況と全く同じなのです。ですからウルドゥー語の詩の中に英語の詩想を反映させられるのは、この二つの言語を知り、英語の如何なる精妙さや詩想がウルドゥー語に相応しい装身具足りえるのかということを理解している人々なのです。

同胞の皆さん。力強い表現、感動を与える題材、精妙な技巧という手段を皆さんの祖先は他のどの言語にも引けを取らない程皆さんの言語に残してくれました。しかしきわめて残念なことに、それらは好ましからざる領域に閉じ込められています。その領域とは何でしょうか。恋愛という領

²¹ ムムターズ・アリー編集版『アーザード詩集』では、「自分の倉庫」。

域です。少しばかりの逢瀬の歓び、長く続く悲しみ、それらにもまして愛しい人を想って流される涙、酒、酌人、春、秋、天への恨み言、成功した者たちへの追従…。しかもこれらの主題は全く空想的で、大抵、いくら考えても分からない程複雑で意味的にほとんど関連性のない隠喩で表現されています。詩人たちはそれらを綺想 (*khayāl-bandī*)、精緻な詩想 (*nāzuk-khayālī*) と呼び、自慢げに口髭を捻っています。悲しむべきことに、この限られた領域からほんの少し外に出ようとしても、彼らは足を動かすことができないのです。何か実際の出来事や知的な題材、道徳的な事柄を詩にしようとしても、彼らはそれらについて書くのを疎ましく思うてしまうのです。

中身の無い、ありもしない事柄に力を浪費し、才能の宝庫を有益なことに用いず、無益に蕩尽しているということ——このこと以上に残念なことがあるでしょうか。英語の詩においてあらゆる事柄や題材が散文よりもはるかに美しく表現されているのを見ると、まさに言葉に命が吹き込まれ、題材が活かされているのを見ると、どれ程羨ましく思えることでしょうか。しかし我々とは言え…。聞いて残念に思うべきです。自分を見て恥ずかしく思うべきです。ぎごちないとは言え、我々は散文を書くことができます。同じように詩も作ることができたなら…。今、素晴らしい範例は英語の中にあります。とは言え我々は知っています、我々の祖先がラディーフ²²やカーフィヤ²³とともに、心地よい韻律、精緻な詩想という財産を我々に残してくれたということを。努力すれば我々は誰にも引けをとらないでしょう。

同胞の皆さん。しばらくすると今作られているような詩を作る詩人すらいなくなってしまうのではないかと私には思えます。同情が涙を流します²⁴。評価されないのであれば誰もそのような詩を作ったりはしないでしょう。古い偶像がいくつか残っていますが、それらは風前の灯火です。我々の言葉は詩を失い、ウルドゥー語から詩の灯りが消えてしまうでしょう。

同胞の皆さん。どうか自分の国の言葉を憐れんでください。どうか祖国と祖国の人々の昔からの名声が傷つかないようにしてください。いくつかの限られた領域に、否、いくつかの鎖に縛りつけられている皆さんの詩を解き放つ努力をしてください。さもなければ皆さんの子孫は全く詩を持た

²² ラディーフ (*radīf*) は、詩行末で反復される語 (句)。

²³ カーフィヤ (*qāfiyah*) 脚韻のこと。

²⁴ 同情が擬人化されている。

ない時代を迎えることになるでしょう。祖先の栄光、祖先の偉業から遠ざかってしまうのは本当に悲しむべきことです。

無論、しばらくはこの（詩を束縛から解放するという）努力は困難に直面することになります。この限られた領域にあるのは、150年に亘って非常に優れた言葉の達人たちが朝夕考えて生み出したものであるからです。心血が注がれ、知恵が絞られてやっとこのような素晴らしい詩想、洗練された言葉、清新な連語、彫琢された形態、胸を熱くする内容、目を引く表現法が生み出され、聞く人に感動を与えているのです。もし今、誰か詩才のある人が目の前にあるありふれた物のどれかについて詩を書き、その中に同じように妙味を生み出そうとしても、難渋することでしょう。全世界が称賛の、我々が感謝の花を振り撒く墓に眠っている人たちが、先程述べた狭い領域の中だけであるとは言え、達成したことというのは、同じような人が現れ、同じような努力をして同じような精妙で美しい様式を詩に普及させるのに何年も何年もかかることなのです。

とは言え希望を失ってはいけません。努力すれば我々も何かしら達成できるでしょう。デリーは一日で薔薇園になったのではないのです。さらに留意すべきは、今日まで先程述べた領域を活気づけてきた題材というのが、呪われた悪魔がその持てる限りの美味、妙味をたっぷりと入れ込んだ、他を圧倒する題材であるということです。詩人の言葉に面白味がほとんど見られなくても、先程述べましたような題材は爆薬のようなもので、その爆風で詩句を高く吹き上げることができるのです。一般的な題材にそのような輝きを生み出すには言葉と表現の天与の才、高い水準の真の雄弁さが必要です。それらがあれば、題材は熟成され、それによって聞く者の心は²⁵感動に打ち震えることになります。ずっと私や多くの同胞はこのように考えてきましたが、今日、この講演でそれを取り上げましたのは、昨今我々の政府そして教育の責任を担っておられる高官の方々が、この問題に関心を向けてくださったからであります。まさに我々の文学の進歩の星は今、幸運の^と合を迎えているのです。ささやかな努力を行っただけでも大きな成果を上げることができるでしょう。

同胞の皆さん。皆さんは二つの集団から成り立っています。ヒンドゥーとムスリムです。ご存じでしょうか、ヒンドゥーがどのような人たちであ

²⁵ ムムターズ・アリー編集版『アーザード詩集』では、「それを聞く者の心は…」。

るのか。ヒンドゥーとは、今日我々が欲していることをその言葉の精髓として持っているような人たちです。バーシャーがあるということは現実の状態を表現するのに最上の言葉があるということです。サンスクリットが持つ詩を生み出す力は言葉で言い尽くせるようなものではありません。サンスクリットは詩的な題材は言うに及ばず、歴史から地理、医学、論理学、法学に至るまで、選び取った学問が何であれ、それを詩の形にすることができました。他方、ムスリムの祖先はアラブです。アラビア語は、男性は言うまでもなく、家の女性、否、侍女ですら弁舌を振るい出すと言葉が力強い詩になってしまったような言語です。残念なことではないでしょうか、このような人たちの子孫が祖先の遺産を失ってしまうのは。嘆くべきことではないでしょうか、我々の言語が我々の時代に感動を生む言葉を失ってしまうのは。悲しむべきことではないでしょうか、我々の言語が表現の脆弱さやその他の数多くの欠陥ゆえに公然と非難されるのは。おお、インドの大地よ、もしイムルウ・ル・カイス²⁶やラビード²⁷がいないなら、カーリダーサ²⁸を生み出して欲しい。おお、インドの荒野よ、フィルダウスイーやサアディー²⁹がいないなら、ヴァールミーキ³⁰を生み出して欲しい。ご存じのように、詩作にはまず天与の才、次いでいくつかの後天的な、学習して獲得される能力が必要であり、さらに十分な熱意、継続的な鍛錬が必要です。私は散文の戦場においても騎兵ではなく、歩兵であるに過ぎません。詩の戦場では取るに足らぬ存在です。しかし私の純朴さを見てください。如何なる戦場にでも赴く用意があるのです。何か我が国に役立つことがあるかもしれないと思い、詩と呼ぶには恥ずかしいのでありますが、最近マスナヴィー³¹の形式を用いて様々な内容の詩を何篇か書いてみました³²。夜の情景について書いたマスナヴィーをこれからご披露したいと思

²⁶ イムルウ・ル・カイス (Imr'al-Qais, d. ca. 544) アラビアのアラビア語詩人。

²⁷ ラビード (Labīd, d. ca. 661) アラビアのアラビア語詩人。

²⁸ カーリダーサ (Kālidāsa) 紀元前 4、5 世紀頃のスンスクリット詩人。

²⁹ サアディー (Sa'dī, d. ca. 1291) ペルシアのペルシア語詩人。

³⁰ ヴァールミーキ (Vālmīki) 叙事詩『ラーマーヤナ』の作者とされる、紀元前の伝説的スンスクリット詩人。

³¹ マスナヴィー (mathnavī) 2 行を意味の最小単位とし、第 1 行と第 2 行末で同一の韻を用いる詩型。

³² ムムターズ・アリー編集版『アーザード詩集』では、この文の後には以下のようになっている。

「意味を描く画家たちに描かせたい絵があるなら、例として素描を示さ

います³³。

解説

1874 年 5 月から、ウルドゥー詩の改革を目指してほぼ月 1 回開かれた詩会はウルドゥー近代詩の形成に大きな影響を与えたと言われている。この詩会では従来のようにガザルではなく³⁴、あらかじめ提示された詩題について詩作、発表することが求められた。新しい様式のこの詩会はパンジャブ州教育局の主導のもとに行われたが、社会啓蒙団体パンジャブ協会（Anjuman-e Panjāb 1865 年設立）が関わっていたため、ウルドゥー文学史上「パンジャブ協会の詩会」と呼ばれている。

詩会開始に先立つ 1874 年 4 月 19 日³⁵、ラホールでウルドゥー詩の改革

なければなりません。才気ある人に笑われても構いません、気にしたりはしません。笑いは歓びの表れです。我が国に笑いを提供できるなら、悲しくはありません。むしろ満足です。ですから夜の情景について書いたマスナヴィーをこれから披露したいと思います。眼識ある方々は、『自由』が詩の中でいくつかの束縛を打ち破っていることに気づかれるでしょう。この詩はマスナヴィーですが、マスナヴィーで一般的によく用いられる韻律から足を外に踏み出しています。そのような韻律ではあまり自由がきかないからです。マスナヴィーに用いられる韻律は、宗教によって定められたものでもないのです。あらゆる事柄について分け隔てなく思索しなければならない今日、カスィーダ (qaṣīdah 頌詩) やガザルの韻律でマスナヴィーを書いたとしても罪を犯したことにはならないでしょう。」

³³ この講演のあと、アーザードは「夕刻の到来、夜の情景 (Shām kī āmad aur rāt kī kaifiyat)」と題する自作のマスナヴィー詩を朗読している。この詩は、ムムターズ・アリー編集版では「カドルの夜 (Shab-e qadr)」となっている。ムハンマド・イブラーヒーム編集版では目次には「カドルの夜、夕刻の到来、夜の情景」と記してあるが、本文中の詩のタイトルには「カドルの夜」とは記されていない（カドルの夜はコーランが初めて啓示された夜のことで、ラマザン月の月末 10 日間の奇数日のいずれかの夜とされている）。

³⁴ 従来の詩会では詩の半句（1 行）を提示し、それによって韻律と脚韻とを指定していた。

³⁵ 第 1 回詩会は、「雨季」という詩題で、1874 年 5 月 30 日に行われた。第 2 回詩会以降の詩題と開催日は以下の通りである。

第 2 回、「冬」、6 月 30 日、第 3 回、「希望」、8 月 3 日、第 4 回、「郷土愛」、9 月 1 日（あるいは 9 月 3 日）、第 5 回、「平和」、10 月（何日かは不明）、第 6 回、「正義」、11 月 14 日、第 7 回、「美德」、12 月 19 日、第 8 回、「満足」、1875 年 1 月 30 日、第 9 回、「文明」、3 月 13 日。これ以降につい

を求める講演会が開催された。講演会は夕方 6 時から始められ、ガヴァメント・カレッジの学生や教官、パンジャブ政府関係者などが出席した。講演会はガヴァメント・カレッジのアラビア語教官でパンジャブ協会の関係者でもあったムハンマド・フサイン・アーザード (Muhammad Husain Āzād, 1830–1910) の講演 (ウルドゥー語) で始まり、アーザードの自作の詩「夕刻の到来、夜の情景」が朗読された後、パンジャブ州教育局長ホルロイド (Holroyd) がウルドゥー詩の改革を目指す新しい様式の詩会開始を告げる演説 (英語) を行った。その後、アーザード、ホルロイドの見解に賛成する意見が述べられ、講演会は終了した³⁶。本稿は、アーザードが行った講演の全訳である³⁷。

新しい詩に関する考えが広まるようにと、ホルロイドは、アーザードの講演と詩の写しを他の州の教育局に送り、印刷して各学校に配布するよう依頼したとのことであるが³⁸、これに関する資料が発見できないため、本稿では、講演が収録されている、アーザードの息子ムハンマド・イブラーヒームが編集した下記の『アーザード詩集』に収録されたテキストを翻訳に用いた。

Muhammad Ibrāhīm, ed., *Naẓm-e Āzād*, Lahore, 1899.

これ以外にムムターズ・アリー (Mumtāz ‘Alī) が編集し、1899 年にラホールで出版した『アーザード詩集』に収録された講演のテキストも参照し、テキストに顕著な異同が見られる場合には註記した。

ムハンマド・イブラーヒーム編集版『アーザード詩集』ではこの講演には題名はないが、ムムターズ・アリー編集版『アーザード詩集』では「ウルドゥー語の詩文 (Urdū zabān kī naẓm-o-inshā-pardāzī)」という題名が付けられている。同版の講演末尾には 1874 年 5 月 8 日と講演日が記載されているが、講演は 1874 年 4 月 19 日に行われたと考えられている。

ては不明。

³⁶ Muhammad Ṣādiq, *Āb-e ḥayāt kī ḥimāyat mēn aur dūsre mazāmīn*, Lahore, 1973, pp. 59–64.

³⁷ 以前、訳したことがあるが (「パンジャブ協会に於けるウルドゥー詩刷新の試み (V)」、『大阪外国語大学論集』第 7 号、1992 年)、今回全面的に改訳した。

³⁸ Muhammad Ṣādiq, *op. cit.*, p. 65.